
不意討ち系♪魔法☆少女 ナナセちゃん

OTAM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不意討ち系♪魔法☆少女 ナナセちゃん

【Nコード】

N1800Y

【作者名】

OTAM

【あらすじ】

突如姿を現した異形の脅威。 彼らから人々を守るのは幼い魔法少女。

けれど、彼女には誰にも言えないある秘密があつて……。

魔法少女現る

街を行き交う人々が暮れなずむ空を見上げる。

視線の先、ビルの屋上には不気味な影。

巨大な翼に二足歩行可能な四肢。

そして頭は胴体と一体化している上に巨大な目が一つ。

どの図鑑を漁っても載っているはずのない異形だった。

観衆の間にどよめきが広がる。

けれど、野次馬達に恐れる気配も慄く様子もない。

何故か？

その異形の恐ろしさ知らないから？

否。

彼らの多くは一度はその圧倒的な脅威を目の当たりにしている。

たとえ肉眼で捉える事はなくとも。

新聞で。

ニュースで。

あるいはネットで。

ならば何故、その異形を前にして逃げ惑わないのか？

その答えは――

「――――ッ！！？」

何の前触れもなく異形が吼える。

正確には悲鳴を上げたとも言うべきか。

突然身をよじらせ、泡を吹きながら天へ向かって奇声を発する。

「――――あ！！？」

少し間をおいてもう一声。

刹那、野次馬達が割れんばかりの歓声を上げた。

彼らの眼差しはもはや異形の怪物には向けられていない。

羨望と好奇の入り混じったその視線は怪物のすぐ後ろに向けられていた。

突然、姿を現したもう一つの影。

それは間違いなく人間の形をしていた。

それは頭の高い位置で縛った長い髪を揺らしていた。

何も特別な事なんてない、平凡なポニーテール。

それは異様に長い槍を携えていた。

金色に輝く穂先が異形の目を背中から貫いていた。

どこかセーラー服を彷彿とさせるデザインの衣装の上に短めのケ
ープ。

胸元では大きなリボンが揺れている。

フリルのついた膝丈のスカート。

それは得物とはあまりにも不釣り合いなほどに小さかった。

要するに――年端もいかない少女だった。

穂先のすぐ近くを掴み、ゆっくりと槍を引き抜く。

刃渡りが50センチ、柄は3メートル近くと随分と長大な槍だ。

石突きには金色に輝く小さな宝玉が取り付けられている。

槍を引き抜いた直後、異形は力なく崩れ落ちた。

そのままビルから転落、地に落ちるよりも早く灰塵となった。

「……ふう」

異形の消滅を見届けた少女は小さくため息をつき、屋上から階下を見下ろす。

ギャラリーが彼女に向かって手を振っている。

檜を屋上の床に対して並行に持ったまま、彼らに向かってお辞儀を一つ。

割れんばかりの喝采。

それが少女の耳へと届いた瞬間、彼女は現れた時と同じく忽然と姿を消した。

「ふう、疲れた」

消えた少女が姿を現したのはとあるワンルームマンションの一室。

少女とその家族が住むにはいささか狭すぎる。

しかし、間違いなくそこが彼女の住処。

「お疲れ様、ナナセ」

衣装の袖で汗を拭おうとする彼女にタオルが差し出される。

タオルを手をしているのは一匹の小さな異形。

たとえるならばモモンガに小さな手を2つ追加したような姿をしている。

図鑑に載ってはいないが、図鑑に載っている生き物の突然変異としてはあり得る。

そんな印象の、基本的には愛くるしい生き物だった。

ただ、その生き物は人語を話す上に、さも当然のように滞空していた。

滑空ではなく、滞空。

それも一切羽ばたくような仕草を見せずに。

少女はその生き物の存在に何の疑問も覚えず、当然のようにタオルを受け取る。

タオルは濡れている上に良い具合に熱を帯びていた。

両手でそれを持って、思い切りよく顔をうずめる。

「ふはーっ！ 生き返ったあー！！」

外見に似つかわしくないそんな言葉を発した。

もちろん、少女がである。

つい先ほど視線と喝采をほしのままにしていた少女が、である。

「やれやれ。とてもじゃないけど他の人には見せられない醜態だね」

「別に良いでしょ、家の中なんだから」

「ボクがいるんだけど？」

「畜生は人にあらず」

そんな台詞と一緒に使い終わったタオルをモモンガめがけて投げつける。

モモンガはそれを上手く回避すると両の手でしっかりと受け止めた。

「一応、本体はヒト型をした生き物なんだけどね」

「興味ないわ。それより……」

「はぁ……お風呂なら沸いているよ。夕飯はあと15分くらい待つて」

そう言い終えると同時にモモンガは風呂場へと飛んで行く。

少女がその後を追いかけると、洗濯機に使用済みのタオルを突っ込んでいた。

「魔法文明の使者が文明の利器に頼る姿はいつ見ても間抜けね」

「その文明の利器を使いこなせない機械文明の住人よりはマシだよ」
両掌を天井に向けて、やれやれと言わんばかりに首を振る。

「……私が上がるまでに支度を済ませておいてよね」

「分かってますとも、ナアナセさま」

「はあ、マスコットらしくもう少し可愛げってものを意識したら？」
毒づきながら少女は衣装を脱ぎ始める。

と、言っても手を用いていそいそと脱ぐ訳では断じてない。

淡い光に包まれた直後にはケープが光子となって霧散。

続いてスカート、制服、そして髪の毛を縛っていた大きなリボン。

最後には少女の身体全体が光に包まれ――

「マスコットらしい可愛げねえ……」

心底あほらしいと言った様子で嘆息するモモンガ。

「それを君に言われたくはないよ」

少女を包んでいた光が弾け、一糸まとわぬ肌が露わになった。

モモンガの視線なんて気にも留めずに浴室のドアを開ける。

「なんでよ？」

ドスの利いた声とともにぎろり、とモモンガを睨みつける。

「そんなの決まっているだろ」

モモンガは彼女から少しばかり視線を逸らしつつ、答えた。

「――君が32歳の魔法少女だからさ」

浴室の鏡には熟れた女性の裸が映っていた。

魔法少女の好きなもの

魔法少女（32歳）の朝は早い。

具体的には5時45分、けたたましい目覚ましのベルで始まる。

ついでにマスコットの朝はもっと早い。

具体的には5時きっかりに誰に言われるでもなく目を覚ます。

もっとも、これは彼らの母世界のサイクルの兼ね合いによるものだが。

「おはよう、ナナセ。 お風呂も朝ご飯もばっちりだよ」

「おはよー、相変わらず召使い力高いわね」

「おかげさまで。 いい加減、彼氏の一人でも作って欲しいんだけどね」

呆れ果てながらそんな皮肉を口にするモモンガモドキ。

彼の視線など気にも留めず、ナナセは無造作に寝巻を脱いで裸になった。

「まったく、羞恥心のかけらも無いね」

「畜生の視線に恥じらう方がよっぽど変態じみてるわよ」

「……はあ、ごもつとも」

「それに私の裸を見て平然としているアンタも大概だと思うわ」

と、ナナセは肩を竦めてみせた。

「当たり前だろう、32歳なんて老人じゃないか？」

とは言うものの、ナナセは適当なアンチエイジングのわりに若々しい女性である。

肌のつや、大きいと言うことはないがバランスの取れたスタイル。

少し中性的な顔立ちはどんな髪型にしても彼女の魅力の一側面を引き立ててくれる。

今現在の寝癖でぼさぼさのセミロングの髪でさえもある種の色気を醸し出す。

間違いなく美人と呼ばれる部類で、彼女が独身と知って喜ぶ男は決して少なくない。

街を歩いてナンパされるようなタイプではない。

が、バーのカウンターで物憂げな顔をしていれば誰かが声をかけるであろう。

そういう雰囲気を帯びた女性である。

「……その思想、アンタらの世界では一般的なのかしら？」

「僕らの世界の結婚適齢期は15歳だよ。ま、僕の好みは10歳前後だけど」

「つまり、一般的な魔法少女の年齢の女の子に欲情する訳か」

この発言には流石のナナセもドン引き。

マスコットと言えば時には魔法少女と一緒に風呂にも入る存在。

それが彼女たちの柔肌に劣情を催すなど、とてもじゃないが絵に出来ない。

それでもせめて年齢が魔法少女らと同じくらいなら可愛げもある。

しかし、彼の場合は色を知っていても何らおかしくはない年齢である。

そんな精神の持ち主が、事もあるうか魔法少女に欲情するとは…。

そりゃ30代を魔法少女にするように指示される訳だ。

「もっとも、その点についてナナセにとにかく言われる筋合いはないけどね」

「……まあ、結局はアンタらの勝手なものね」

「いや、そうじゃないよ、ナナセ先生」

“先生”をこれでもかどばかりに強調。

32歳。その実年齢で独身であれば手に職があっても何らおか
しな事はない。

何かしらの夢や理想を追いかけたその結果なのか。

或いはただ糧を得るための手段と割り切ったものか。

人によっては公務員の安定感に惹かれた、と言うケースもあるだ
ろうか。

――が、生憎とナナセの場合はそのいずれにも該当しなかった。

「僕が言いたいのはね、君が彼氏を作ろうとしない理由についてな
んだよ」

「作ろうとしない訳じゃないわよ。好みの男が現れないだけ」

「君の望みが無謀すぎるからだよ。若くないんだから妥協しなよ
？」

「っは、ここまで粘ったのに今更妥協なんて」

威勢よく鼻息を吐く彼女の様子を見てモモンガモドキはため息を
一つ。

「いい加減現実を見なよ。毛の生えてない合法シヨタなんて都市
伝説なんだから」

「いいや！　きっと居るわよ！　収入も才能も性格も望まないんだもの！」

そう、彼女が先生と呼ばれる由縁は教師をしているからである。

会話の流れを見れば分かる人には分かる通り、小学校で教鞭を取っている。

彼女がその職を選んだ理由は「小学生とか好きだから」の一語に尽きる。

「居ないよ！　毛なんてどうでも良いだろ？　最悪剃ってもらえば良いじゃないか！」

「嫌よ、剃り残しとか想像するだけで虫唾が走る！　あんな汚物、触りたくもない！」

良い！？　私はあの毛むくじやらの肌色ナマコが大っ嫌いなもの！
見たくも無いの！

正直言っただけで怖くて仕方がないの！　あれを啜えられる人の神経が理解出来ないの！」

「いや、啜える人の気持ち的理解出来ないのはまあ、理解出来るけどさ」

もっとも、衛生面で言えば皮を被っているのもそれはそれで不潔になりがちなのだが。

何はともあれ、これが彼女が小学校に勤める最大の理由だった。

「小学生の男の子は良いわよね！　小さいし、滑らかだし、素直だし、アホだし……」

その他、賛辞と言うより罵詈雑言に近い言葉を目を輝かせて並べまくる。

傍から見ればこの光景こそ惨事も良いところであろう。

女性の好みは10歳前後の本体は成人男性のマスコット、モモンガモドキ（本名不詳）。

そして、小学生しか愛せない32歳の魔法少女、ナナセ。

これが巷を賑わす魔法少女の正体だなどと、果たして誰が想像出来ようか。

変身バンク、始めました

この辺りの児童達にとってはなじみの通学路にて。

「先生、おはようございます!」

元氣な挨拶と共にナナセの横をすり抜けていく児童達。

徐々に暖かくなり、昼になれば何もしなくとも汗ばむ季節。

それでも朝早くのこの時間はまだまだ涼しく、彼らが駆け回るにはちょうど良い。

「うん、おはよう、宮迫くん」

「おはようございます!」

「おはよう、田辺くん」

「おはようございます、奈々美先生」

「おはようございます……えーっと」

「同じ学年の担任の相良です……ってこの紹介もう4度目なんですけど」

「ごめんなさい、生徒の名前を覚えたところでキャパシティオーバーしてしまってます」

ナナセに声をかけたもう一人の教師の名は相良 太郎。 モブなので覚える必要はない。

どうやらナナセが5つほど年上と知りつつも気があるらしく、何かと声をかけて来る。

が、ナナセにとっては彼などストライクゾーンの遥か彼方、大暴投も良いところ。

眼中にない、どころか視界に入ってくるだけでも虫唾が走るレベルなのだ！

「いえ、お気になさらず。生徒の名前を覚える方が重要ですから」が、生徒の名前を覚え過ぎた為に他の人名が頭に入らないと言うのも強ちウソではない。

ナナセが名前を暗記している生徒の総数は512名。

彼女の勤める学校に通う少年少女達の約9割に相当する数であった。

ちなみに、覚えていない残りの1割は既に毛の生えた男子。

要するに毛の生えた野郎の名前なんぞ覚えてたまるか、と言う事である。

女子は毛が生えていても問題ないらしい。

『と言うか、それは間接的に女子も欲望の対象だって言ってるよう

なもんだよね』

『いきなり念話で話しかけてこないでよ。苦手なんだから』

『じゃ、肉声で話そうか？ どうせ、肩に乗っかってるんだし』

皮肉っぽい声と口調の主はマスコットの存在、モモンガモドキ。

現在は姿を消す魔法を使っているのでよほどの探知魔法でも使わない限り補足は不可能。

ナナセ宅の家事は朝と夕方以降で大体済んでしまうため、こうして学校にも同行する。

目的は主に3つ。

一つ目は“敵”が現れた時にすぐさま彼女にそれを伝えるため。

二つ目はただ家にいてもやる事がないから。

そして、三つ目は……

「あ、おっはよー、ナナセせんせっ!!」

「おはよう、水鏡さん」

一人の少女が桃色の髪を翻してナナセの横をすり抜けて行く。

『むっほー！今日も水鏡たんは可愛いなー!!』

『黙れ、そして速やかに死ね。このロリコン淫獣野郎』

『……そう言うナナセだって本当は興奮しまくりでギンギンのくせに』

三つ目は……ロリ分を補給するためであった。

ナナセとしてはいつ生徒が危害を加えられるか気が気じゃない。

が、目の届かない所の置いておくのもそれはそれで不安なので少々同行を認めている。

『とにかく、イエスロリータノータッチは厳守しなさいよ』

『分かってるよ。足を舐めるぐらいしかしないから』

『だから触れるなって言ったでしょうが!?!』

「は、はい?」

思わず声に出してしまったナナセの様子をモブ先生が怪訝そうに伺っている。

自分の失敗に気付いた彼女は苦い笑みを浮かべて、

「な、なんでもありませんよ……」

とはぐらかし、早足で校舎へと向かった。

『アンタのせいで突然叫ぶ電波女になっちゃったじゃない』

『三十路のそれは電波とは言わない。ただの○チガイだ』

『そんなもん、どっちだって良い!』

念話で口論しながら職員室のある3階へ向けて階段を上るナナセ。

ふと見上げると、数歩先に先ほどの少女、水鏡 実花の後ろ姿を捉える。

これでもかと言わんばかりのミニスカートを履いており、下からだと下着が見える。

よほど自分に自信がないと出来ない格好だ。

『ごあつ!?!』

眩い白を直視し続けたモモンガモドキが血を吐いた。

その気配を察してナナセは、こいつ絶対童貞だわ、などと思いつつ彼女に声をかける。

「水鏡さん、下着が見えてるわよ?」

「え? 違いますよ先生。見せてるんです!」

「こらこら、そういうことを言うんじゃない」

「えー、どうしてですか？」

「安易な色仕掛けに釣られて寄ってくるのはアホばかりと相場が決まっているからよ」

『これだから小学生は最高だぜっ!!』

たとえばこんなだよ、と言ってみせればどれだけ楽か、とナナセはため息をついた。

何か良い説明はないものかと考え始めた、その時――

『……！ ナナセ、敵襲だよ！』

『こんな朝っぱらから、面倒ね……』

「とにかく、スカートの丈を直せるなら直してから、教室に行きなさい」

「はあい」

素直に返事をして手洗いに向かった彼女を見送ったナナセは職員用トイレに駆け込む。

そして中に他の教員がいない事を確認してから、胸に両手を当てて祈った。

と言っても、具体的に何に祈ったという訳ではなく、念じたという方が正確だろうか。

「さあ、早くして」

「言われなくても」

ナナセの頭上にモモンガモドキが飛び乗り、彼もまた念じる。

刹那、ナナセの衣服が消滅し、裸身が露わになると同時に彼女の全身が光に包まれた。

すらりと伸びた四肢も、豊かな乳房も徐々に縮んで、あっという間に少女のそれに。

輝く身体を手袋が、靴下が、靴が……何故か優先順位の低いところから隠されて行く。

とどのつまり、典型的な魔法少女の変身シーンという奴である。

やがて全身くまなく魔法少女の衣装に着替えたところで、身を包んでいた光も消滅。

虚空に出現した杖を手に取り、バトンのように

最後に何処からともなく現れたリボンが、少女の長い髪を纏め上げた。

魔法☆少女ナナセちゃん、参上！

「さて、行きますか。ホームルームまでに片づけるわよ」

頭上のパートナーにそう宣言すると、彼女は職員用トイレの窓か

ら飛び出した。

魔法少女の戦い

「で、敵はどこ？」

「北の繁華街。活気に引き寄せられたみたいだ」

職員トイレのまどから飛びだしたナナセは近くのマンションの屋上に着地した。

一口に魔法少女と言っても色んなタイプが存在する。

万能タイプ。この系統の魔法少女の魔法は融通無碍に何でも叶える力を持つ。

女兒向けアニメに顕著に見られるタイプで、魔女っ子と呼ばれる事が多い。

精神操作は不可とか、正体バレは禁止とか、一定のリスクはあるがとにかく強力。

一定のリスクが解除された場合、魔女っ子と言うよりも神とも言えるべき存在。

次いで特殊能力タイプ。この系統は一つ的能力しか使えない。

たとえば変身だけに特化した者が該当し、効果だけでは異能や超能力との境界が曖昧。

魔法と明言されない限りは後者とされる傾向が強く、魔法少女扱

いされない事も多い。

変身にも動物限定や大人になるだけなど色々系統があるが、長くなるので割愛。

そして、戦う魔法少女。近年では魔法少女と言えば戦うものというイメージすらある。

魔法という言葉をあえて前面に出さない美少女戦士もこのカテゴリに入るだろう。

使途が戦闘に限定されているが、魔法で出来る事はかなり多い。

ナナセの魔法少女としてのカテゴリは——言うまでもなく戦う魔法少女である。

「距離はどのくらい？」

「7kmくらいだね」

「となると、テレポート70回分か。しんどいわね」

テレポート。ナナセの使える数少ない魔法の一つであり、唯一の移動魔法である。

他に使える魔法はマーキング、光の刃、電撃、服毒。それから必殺技の5つ。

魔法少女に必殺技が必要だなんて世も末だが、そんな末が何年も続いている。

「30ターンもあれば余裕だろ？」

「……まあね」

当然でしょ、とでも言いたげな口調で答えたナナセは再び跳躍した。

他の魔法、特に索敵や一般市民の保護はマスコットに任せっきりである。

その頃、繁華街の車道を巨大な亀のような生き物が元気よく逆走していた。

亀と言っても亀の特徴を引き継いでいるのは甲羅くらいのもの。

その甲羅もゾウガメよりも大きく、マイクロバス程度のサイズを有している。

加えて甲羅から生えている足の数は6本。 亀にしてはあまりにも多い。

トドメに頭部が飛び出している位置に生えているのは真っ白な人間の上半身に近い。

何やら粘液に包まれた禿げ頭の女性の姿はグロテスク極まりない。

その進行を止めるべく置かれたパトカーを人間の倍に相当する長

さの腕で薙ぎ払う。

それだけでパトカーは盛大に宙を舞い、近くのビルに突っ込んだ。一般市民を避難させつつも、警官たちは必死に銃器での応戦を試みる。

が、その異形へと放たれた弾丸は一発たりとも威力を発揮する事無く地に落ちる。

「ふう、到着……なるほど、あいつね？」

出動からおよそ140秒。

特に何のトラブルも無く、異形の下に到着したナナセがビルの上から亀を見下ろす。

幸いにも警官たちの努力によって民間人の死者は一人も出ていないようだ。

「で、どうするつもりなんだい、ナナセ？」

「そんなのいつも通りにきまつてるでしょ？」

「そうかい、せっかくなんだから口上とか決めポーズとか……」

「いつも言ってるでしょ？　そう言う無駄な事はしない主義だって」

言うが早いのか、手にした杖から金色の雫が垂れる。

その液体の正体は彼女の魔力で作りとされた毒。

本来認識さえも不可能な筈の異世界への干渉を可能にする異端の法則、魔法。

その根源たる力、魔力で作りとされた対象の魔力の精製を阻害する。

マスコット曰く、魔法のある世界の生物にとってはかなり危険な代物らしい。

もっとも、ナナセは魔力や魔法が何なのかさえも良く分かっていないのだが。

ただ、モモンガモドキから魔法についての説明を聞いた瞬間、これに思い至った。

相手に見えない場所からこれをレポートで対象の体内に送り込む。

これが名乗りも決めポーズもしない魔法少女の必勝の戦術。

「だからってその戦い方はどうかと思うけどね。ただの殺し屋じゃないか」

「実際、殺し屋みたいなもんじゃない」

「愛と夢と希望の使者、魔法少女が言う台詞じゃないね」

「こんな血生臭い世界に愛も夢も希望もあるか。寝言は寝てる時に

「言え」

皮肉っぽい口調でそう答えた直後、金色の液体がナナセの視界から消えた。

「もっともだよ。少女の夢っていうのはもっところお花畑の中で育まれるべきだ」

愛と夢と希望の使者。その標語は魔法少女に対するイメージ戦略の一環。

自分達が異世界に出向かず、異世界間犯罪への対応を現地の住人に押し付ける方便。

モモンガモドキが彼女を、ナナセを魔法少女にしようとした理由はそこにある。

Yes！ロリータ！ No！タッチ！を信条とする彼には許せなかったのだ。

希望も未来も魅力（無論性的な意味で）もある童女達を死地に赴かせる事が！

どうせ死ぬなら年功序列でババアから死ねば良い！

そんな理由で彼は三十路のナナセを魔法少女に仕立て上げたのだッ！！

「おっ、うずくまった……って言うか隠れた」

「大丈夫なのかい？ 君にあの甲羅を突破する術はないだろう？」

「そんな問題ないわよ」

「必殺の魔法でも使うつもりなのかい？」

「まさか。 こんな場所で撃ったら危ないじゃない」

淡々と答えたつつ、再び金色の猛毒を作ってテレポート。

直後には再び新たな毒が精製されている。

「……死ぬまで毒を盛り続ければ良いだけでしょう？」

こともなげに言い放つ彼女を見て、モモンガモドキは思わず階下の亀に同情を覚えた。

平和なホームルーム

「ふう、何とか間に合ったわね」

「それにしてもあの倒し方は流石に引くよ……」

「勝てばいいのよ、勝てば」

変身を解き、スーツ姿に戻ったナナセはそんな言葉を平然と吐いた。

子どもを戦場に立たせるくらいなら、自分が戦う。

それは彼女が戦闘と言うものに抱くイメージを端的に表す言葉でもある。

「それにしても、アレは流石に子どもの夢をぶち壊しだよ」

「銃後の美少年達の命と貞操が守ればそれで十分」

「いや、彼らはそんなものを欲しじゃないから」

「そんなの分からないわよ。それより、外に出るからテレパシーに切り替えて」

言うが早いか、職員用トイレを後にしたナナセは靴を鳴らして足早に廊下を歩く。

モモンガモドキは彼女の頭に飛び乗ると、魔法で姿を消した。

言葉を交わす事も無く一定のリズムで歩き、やがて一つの教室の前で立ち止まった。

5年3組。児童数は男子16名、女子15名の大した特徴のない至って平凡なクラス。

それが彼女が担任を務めるクラスである。

「みんな、おはよう。 さつさとホームルーム始めるわよ！」

相手は子どもだが、愛想や可愛げをあまり感じさせない作り笑いを浮かべるナナセ。

自分を可愛く見せようとか、相手に不快感を与えない為の言った笑顔ではない。

ただ、彼女の顔が最も映える形がたまたま笑顔と形容される、そんな表情だ。

それゆえか、笑っているのにどこか澄まし顔のように見えなくもない。

今まで騒いでいた児童達は、そんな笑顔を見るや否や自分の席に着席した。

「起立！ 礼！ 着席！」

クラス委員長の号令に従って一連の動作をこなし、ナナセの言葉を待つ。

模範的ではあるがいささか年相応さに欠ける態度。

それは、ナナセに対する率直な敬意の表れとでも言うべきもの。

相手が子どもでも、職場が小学校でもパリッとしたスーツを着こなす才女。

彼女が自分達に一定の敬意を払っている事を子ども心に理解しているのだ。

その事実とフォーマルな衣装の持つ適度な堅さが少年少女に不思議な緊張感を与える。

子どもと大人という前提の無い彼女の姿勢に彼らなりに応じようとしているのだ。

……実際は小学生に劣情を抱くが故に、彼らの目線を気にした結果に過ぎないのだが。

しかし、彼らがそんな事実を知る由もない。

「まずは朝の10分読書。如月さん、工藤くん、河野さんには感想を述べてもらいます」

表面上は平然としているが内心ギンギンのナナセの言葉を受けて児童達が本を取り出す。

読む本の選択肢は学校側から指定されているため、大体は無難な児童書を読んでいる。

中には『罪と罰』とか昔のライトノベルを手に行っている児童もいるが。

ちなみに前述の傑作に浸っているのは河野さん。

その様子を見たナナセはどんな感想が飛んで来るのかと少し冷や汗ものである。

彼女が児童達の手にした本を眺めている間にも時間は過ぎて行く。

そうして、特に何事も無く静かな10分間が過ぎ去った。

「じゃあ、本を閉じて3分間で感想を纏めて」

彼女の一声で本を閉じて、思い思いの方法で考えをまとめ始める児童達。

ある女子生徒は限られた時間ながらも簡潔な文章に纏め上げようと悪戦苦闘。

その隣の男子生徒は読書の最中に取ったメモに目を通し、沈黙考している。

彼女は文章を要約する能力が向上し、彼はメモをとる習慣が身につくだろう。

今日感想を述べる3人へと視線を向ける。

如月さんは要点だけを書き出して後は頭の中で整理しているらし

い。

工藤くんは予め感想を用意していたらしく、余裕綽々で天井を見上げている。

河野さんはぼんやりと窓の外を眺めていた。

『本の感想って課題一つ取っても皆対応が違うもんだね』

『面白いでしょう？ 色々分析して、自分なりに効率の良い対策を練ってるのよ』

性欲だけで教師をやっている訳じゃないんだな、と感心するモモンガモドキ。

関心の方向性がおかしいのはさて置き、ナナセは確かに教師としても優秀だった。

たった10分間の読書。 それだけの課題を通じて、彼女は児童の能力を引き出す。

たとえば予習の習慣。

とっさにメモを取るクセ。

或いは要約や、それを通り越して速筆という形で。

時にはナナセにも想像のつかない進歩を見せる児童だっているかも知れない。

確かな事は、彼女はそのどれをも否定しないということだ。

ただし、いい加減な態度で臨む事だけは許さないが。

「では、河野さんから行ってみましょうか？」

「はい」

短く返事をした一人の女子児童が静かに立ち上がった。

おかつぱと言うほどには野暮ったいものではないがそれに近い髪型の黒髪。

白いブラウスに、膝丈よりも長い漆黒のスカート。

トドメとばかりに黒縁の眼鏡が無愛想な表情を仮面のように覆い隠していた。

帯びた雰囲気も年齢不相応に落ち着いていて、不気味ささえも漂わせる。

立ち上がった河野さんはそんな児童だった。

「感想をどうぞ」

「私にはまだ5年ほど早いと思いました」

「……まあ、そうでしょうね」

ある意味で想定通りの答えに呆れつつも安心し、河野さんに着席

を促すナナセ。

こんな感想でも、うっかりラスコーリニコフに同調されるよりはマシだろう。

勿論、仮に同調したとしても彼女はそれを頭ごなしに否定はしないが。

——もつとも、それを実践しない限りは、だが。

「さっすが江子ちゃん。フリーダムだね！」

「何がさすがなのか分からない」

河野さんは隣の席の賑やかな児童——水鏡 美波——の言葉を淡々と受け流した。

放課後は騒乱の予感

授業はつつがなく終わり、放課後。

男子児童達は待つてましたとばかりにランドセルを背負いながら教室から飛び出す。

女子児童は彼らを「子どもねえ」とでも言いたげな目で眺めている。

が、クラスメイトと話す彼女たちの表情も退屈な授業からの解放感で輝いていた。

ナナセの授業は比較的好評で、クラス全体の成績もかなり良い。

とは言え、やっぱり遊びたい盛りの子どもにとって50分の座学は苦痛でしかないのだ。

「それじゃ、せんせー！ さよならっ！」

「先生、さようなら」

やたらと賑やかな挨拶と子どもらしさを置いてけぼりにした堅苦しい挨拶の二重奏。

前者は水鏡 美波のもので、後者は河野 江子の口から発せられたものだった。

「うん、また明日ね」

この時はナナセも普段の子ども相手にしては堅い態度を崩し、柔和な笑みを浮かべる。

家に帰るまでが学校なんて言葉もあるが、実際にそれを守る子どもは殆どいない。

終業のチャイムを聞いた瞬間に、児童達の集中力は途絶えているのが普通。

そんな彼らに気を引き締めると訴えたところで効果は薄いだろう。

だから、ナナセは帰りのホームルームでは“厳しい先生”の仮面を外す。

『あの2人、性格はあんななのに仲は良いんだよなあ……』

姿を消したまま、魔法の効果が及んでいる不可視の鼻血を垂れ流すモモンガモドキ。

そろそろ面倒になって来たのでモドキと略したい。

今、彼の脳裏では幼い2人の淫靡で背徳的な放課後が繰り広げられている事だろう。

『下らない事を考えてないで仕事をなさい。屋上ならまず見つからないから』

ぽたぽたと頭を濡らすその感触に顔をしかめながら、頭上のモドキを睨むナナセ。

ちょうど教室内の女子が居なくなったのを確認したモドキは言われるがままに屋上へ。

やれやれ、とため息をつきながら見えない後ろ姿を見送る。

それと前後して、残っていた3人の男子も教室を後にした。

残されたのは静寂とナナセだけ。 静けさの中で一人思う。

(どうしたものかしらねえ……)

思い返せば約1か月前。

彼女の前に突如姿を現した異世界の知的生命体の奇妙な要望。

【確かこの世界ではこう言えば良いんだっけ？ ボクと契約して魔法少女になってよ!】

それが、モドキのこっちの事情も困惑も全く顧みない第一声だった。

一方的に話を進めようとする彼を殴り飛ばし、真っ先に年齢について突っ込んだものだ。

有名な深夜アニメの魔法少女の台詞のもじりが持つ不穏さにも特に関心はなかった。

ついでに、不穏さの正体が予想通りタチの悪いものであった事についてでもどうでも良い。

本当に年端もいかない女の子に殺し合いをさせるよりはよっぽどマシだ。

たえろリコンの気は無くとも、一介の教師としての矜持がその感情を肯定している。

羞恥心が無い訳ではないので正体バレた時の事は想像したくない、とは思うが。

故に、ナナセは魔法少女になったこと自体は何ら後悔していなかった。

ただ、いつまでこんな事を続ければ良いのか……と思うとため息が漏れるのも仕方ない。

『なんで1日は24時間しかないのかしらね？』

『地球の自転のせいだろう？ 意味のない念話で小学生観賞タイムの邪m……』

『しゃらあああああああああああああああつぷ
！！』

世迷言を口走ろうとしたモドキに向かって、最大音声の念話を叩き込んだ。

念話。 通常はただ遠隔地に音声を送達するだけの簡単な魔法。

だからこそ、魔法のない世界出身のナナセでさえ変身なしで使用

出来る。

つまり、それくらい簡単な技術なのだ。

が、こんなものでも音声・音量を工夫することで念波攻撃に早変わり。

事実、これを食らったモドキは屋上で白眼を引ん剥いて泡を吹いてたりする。

「さて、職員室に戻るか」

出席簿等の一式をまとめ、ナナセは無人の教室を後にした。

小学校の教師と言うのは意外にデスクワークが多く、決して暇な仕事ではない。

たとえばテストの答案なんか分かり易いところだろうか。

小学校教師の場合、テストの答案の枚数は受け持つクラスの人数の範囲に収まる。

しかし、午前8時には登校し、終業の3時半までの間の休憩時間は計1時間ちよつと。

仕事を家に持ち帰らないように努めた場合、校内では休む暇もなかったりする。

給食の時間と言えど児童の安全に目を配る必要がある為、休息とは言いがたい。

ましてやナナセは答案から個々の誤答の傾向の分析まで行う為、作業量が尋常ではない。

「算数と理科のテストと、あとは何があったかしら……？」

放課後の予定を整理しながら、教室のドアの鍵を掛ける。

腕時計で時刻を確認、足早に職員室へ。歩きながら軽く伸びをひとつ。

『ナナセ！ また来た、今度はかなりたちの悪い奴だ！！』

『1日に2匹？ 今日に限ってえらく多いわね……』

それだけでなく忙しいのに、とウンザリした表情でため息を吐いた。

蝙蝠紳士は血を欲する

「何コレ？」

「幻聴？ 疲れてるのかなあ……」

時刻は午後4時半。 道行く人達が耳を押さえて訝しがる。

老いも若きも男も女の、一人残らず一様に同じような仕草を取っている。

果たして原因は何か？

偶然？ ——そんな訳が無い。

『我が名はスポポゾンドウⅡヌヴェⅡホッポボヴィッティ3万と飛んで17世！』

声の主は異世界からの来訪者。

ギリギリ二足歩行の動物にカテゴリー出来そうな姿形をしている。

曲がりなりにも衣服を着ている。 意外と異世界っぽさの無いス
ーツ姿だ。

先祖への敬意を払う、という程度の習慣は持ち合わせているらしい。

『我は欲する！ うら若き、穢れなき乙女の生き血をッ！！』

付け加えるならば処女信仰も持ち合わせている風でもある。

上下左右前後、忙しく見回す人々の多くは小学生と主婦とお年寄りが専ら。

夕暮れの住宅街という立地を思えば必然と言う他ないだろう。

ちなみにその異世界からび客人が立っているのは電柱の上。

彼には目が無く、鼻が無く、耳が無く、丸々とした頭部はその半分以上を占める口だけ。

両腕はコウモリの翼に近い形状をしており、筋肉や骨を持つ箇所は酷く貧相。

しかし、その先端にある手は禍々しく鋭く力強い。

『さあ、道行くお嬢さんたち！ おじさんにその瑞々しい雫を捧げてみないか！？』

身に纏ったスーツは白と黒のストライプ。 スーツの下シャツは真っ赤。

シルクハットと金色の蝶ネクタイが無駄なアクセントになっている。

そのあんまりな姿に彼を目にした人々は急激に白け、ため息をついた。

やれやれ、と頭を掻きながら、各々が各々の日常に帰って行く。

そんな蔑ろにされまくりの異形を遠巻きから眺めながら、ナナセはつぶやいた。

「アレ、本当に厄介なの？」

「あんなノリだけど強いよ。ただ、あいつらに異世界渡航魔法はない筈なんだけど」

「要するに、誰かが手引きしているってことでしょ？ 分かりきってた事じゃない」

そんな事より、と杖を肩にかけながら言葉を続ける。

「あいつはこういう生き物なの？」

「この世界の言語で名づけるならクチダケコウモリセイジンってところだね」

「学名なんて聞いてない。異世界渡航魔法を使えないあいつはどんな魔法を使うの？」

「念話、飛行、音波、砲撃、回復。あと、あの口に特殊な魔法効果があるね」

「魔法効果？」

「硬度無視、解毒、神経毒の3つが一気に発動する。それも全自動」

なるほど、とこめかみに指を当てて考えるナナセ。

彼女の脳裏に未知の魔法に対する警戒が暴力的なまでの思考能力をもたらす。

「砲撃と飛行はどうでも良いとして、音波魔法は防御も回避も無理よね、音速だし」

「念のために言っておくけど、聞く聞かないよりも振動に触れたらアウトだよ？」

その言葉を聞いて、うへえと顔をしかめた。

「で、触れたらどうなる？」

「さあ、そこまでは知らないね。ただ、死ぬような事はないと思うよ」

「じゃあ、もう一つ聞くけど回復魔法は私の毒には効く？」

「問題ない。君の魔法毒は君以外の魔法の発動、魔力の生成自体を阻害するからね」

「おーけー。それじゃ、さっさと毒殺するわよ」

言いながら、即座に魔法毒を生成したナナセは垂れる雫を瞬間移動させた。

現在彼女の居る場所は近くの留守宅の2階。

窓から異形の後ろ姿を眺めながら、万が一の反撃に備える。

そして――即座に自身の油断のない性格に感謝した。

『おや、お嬢さん！ 私にその麗し鮮血を捧げて下さるのですかな？』

瞬間移動された魔法毒を瞬時に飛び退いて回避し、空中に宙づりになった格好で滞空。

ありもしない双眸で静かに、しかし荒々しくナナセを捉える。

何度も異形と戦いを繰り返した彼女だが、異形に姿を見られたのは初めてのこと。

ひらりと一軒家の石垣に着地した怪物紳士は四肢全てを十全に使って跳躍した。

遮蔽物の電柱を噛み砕き、窓ガラスを突き破り、勢いのままに屋根をも貫く。

当たればひとたまりもないその一撃をナナセは瞬間移動によって難なく回避。

そのでたらめな威力に内心冷や汗しながらも、呆れた目で彼を見上げる。

『素晴らしい！ 私どもの初弾をかわすとは！ 清く、麗しく、そして強い！』

「気色悪いロリコン野郎ね。　って言うか、日本語分かるの？」

『どうやら召喚魔法の恩恵のようです。　意図理解念話もあるので必須でもないですが』

意図理解念話。　音声でも文字でもなく、意図・欲求をそのまま伝える念話である。

情報の精度は高い反面、伝わる情報がコンパクト過ぎる為、相手への負荷は少ない。

コミュニケーションに使うだけなら言語の壁を無効化する非常に優れた念話の形態だろう。

「まあ、そんな事はどうでも良いのよ。　気の毒だけど、死んでもらうわよ？」

『それは残念です。　お嬢さんのようなツワモノ相手にて加減は出来そうにありません』

口だけの怪物が、たった一つの顔の構成要素を吊り上げて全ての感情を伝える。

迫力と悪意に満ちた凶悪な笑顔。

『ここで死んでも……怨まないで頂きたい』

翼に似た腕を広げ、力強く羽ばたく。

一瞬にして巨大な弾丸と化した彼は、電柱に足を置いたナナセとの距離を0に縮めた。

空の舞踏会

スポポゾンドゥⅡヌヴェⅡホッポボヴィッティ3万17世。

あまりにも長ったらしいのでナナセはスポポ17と呼ぶ事にした。

スポポ17はふざけたキャラクターに反して実力の程は折り紙つき。

『ふうーははははっ！ そんな攻撃は当たりませんぞ！』

「……っち、ちょこまかと」

まず、並はずれた機動力を誇っている。目測だが時速700kmはあろう超速度。

付け加えるなら、それに負けないだけの肉体の強度と反応速度も備えていた。

その上、こちらの攻撃に反応して急旋回・急降下と小回りも利く。

有史以来、人類が生み出してきたあらゆる飛行機械を遥かに凌ぐ存在だった。

過去にナナセが倒した連中は科学技術で再現可能な程度の力しか持っていなかった。

自動車をなぎ払うほどの力も、紅蓮の炎も。

彼らは魔法を使えないから倒せないという一点によってこの世界の武力を圧倒しただけ。

近代兵器が通じるならば超音速の掃射で、空からの爆撃で難なく撃破出来ただろう。

しかし、スポポ17は違っていた。

非常識なまで直感で雷速をかわし、自転車でも徐行する細い通りを亜音速で疾駆する。

硬度という概念を無に帰す顎はあらゆる防御・防衛を突破してみせる。

それらの内の幾つかは、間違いなく科学では真似できない代物だった。

大量破壊兵器で辺り一帯吹き飛ばすくらいの無差別攻撃でなければ倒せそうにない。

ナナセがそう判断するのも致し方ない程の強敵だった。

「せめてもの救いは意外と紳士なことかしらね」

『どうしました、お嬢さん！ 逃げてばかりではどうにもなりませんぞ！』

瞬間移動と高速飛行のダンスは縦横無尽に街を駆け巡る。

それにしても物的被害は少なく、人的被害に関しては皆無。

狙った得物以外は襲わない、むやみな破壊は美しくない。そういう性分らしい。

もつとも、だからと言ってそれが戦局に影響するかと言えばそんな事もなく。

それどころか、被害が出るような戦いを封じる形でナナセをいっそう不利にしていた。

——必殺の魔法。その力を解き放てば彼を屠る事も不可能ではない。

が、この魔法は広域殲滅の力であり、市街地で撃てる代物ではないのだ。

もしも、スポポ17が無差別な破壊と殺りくをばらまく存在であれば大義名分があった。

誰もあいつを倒せず、放っておけば被害は拡大する。ならば多少の犠牲はやむなし。

だが、彼の戦いはそれとは程遠い。

無意味な威嚇や大した威力のない攻撃は気にも留めず、危険な攻撃だけを舞って避ける。

そして、わずかでも隙を見せれば、急激な加速を伴った噛みつきがやってくる。

ふざけた外見に反して、その戦いぶりは達人の業とでも呼べる境地に達していた。

「砲撃や音波も使えるって聞いたけど？」

『無駄な被害、無意味な破壊……そんな無粋な趣味は持ち合わせておりませんので』

もう何度目になるかも分からない突撃をかわした直後の舌先の鏢迫り合い。

ナナセの安易な挑発を異界のジェントルはあくまでも上品にあしらう。

砲撃は射程過剰、音波は範囲が広すぎる。

確かにそんなものを使えば無関係な人を巻き込んでしまうだけだろう。

『それに瞬間移動相手に砲撃なんて撃ったら後ろから刺されるでしょう？』

「……なるほど、魔法戦のセオリーってワケね」

そんな納得の後、二人は超高速の舞踏を再開した。

瞬時に魔力の刃を形成したナナセがスポポ17の背後に回り込む。

振るわれた刃を飛翔してかわした異形の紳士は旋回して彼女と向かい合う。

対峙する魔法少女は再び瞬間移動、今度は距離を取って物陰に隠れた。

体勢を立て直したところですかさず足元に落ちていた石を敵の頭上へテレポート。

スポポ17は突如頭上に現れたつぶてを頭頂部で受け止めた。

『?』

何の意味があるのかも分からない投石を受けた頭を押えながら首をひねった。

『魔法の使用回数もそろそろ危ないのにそんな事している余裕があるの?』

「ちょっと黙ってなさい、相棒」

意図が分からず困惑するのはモドキも同様。

ただ一人、ナナセはその光景を見て、ニィと口許を歪めた。

「……見えたわよ、勝ち筋が」

杖を構え直し、夕暮れの空へと跳躍した。

必殺の雷槌

跳躍したナナセの姿が消える。

そして瞬時にスポポ17の背後に回り込むことに成功。

ただし、決定打を与えるには至らなかった。

「おや、せっかく後ろを取ったのに石突きでつつくだけですか？」

決定打になる筈もないと断言できるほどの弱い一撃。

それはナナセの眼前の異形に自らの居場所を教えただけでしかない。

「ふうん、やっぱりそうみたいね」

思った通りと得意気にうなづく彼女を前に、スポポ17は怪訝そうに顔をしかめる。

「ふふっ、何でもないわよ」

やがて、その意図を考える事が無駄だと察した蝙蝠は再び弾丸と化して彼女を襲う。

が、完全にノーモーションでない攻撃に当たる相手ではない。

意識の外側からの奇襲でない限り、テレポーターを捉える事は不可能に近い。

「はああああ……」

姿を現すと同時に、彼女は膨大な量の魔力を生成し始めた。

あくまでも速攻と隠密を重んじるナナセにとっては異例とも言える力の高まり。

スポポ17はその危険性を即座に理解し、我が身を砲弾として特攻を仕掛ける。

しかし、そもそも彼女はその一撃の持つ速力を十分に理解しているのだ。

そんな魔法少女が敵の目の前で大量の魔力の生成を行うということ。

それは即ち、対策はあるという事に他ならない。

大技を警戒し、あまりにも簡単な見落としをしてしまったスポポ17に――

もはや勝算はなかった。

「消費魔力は10ブロック」

彼の特攻を魔力を練り上げながらの瞬間移動で回避したナナセが杖を天に掲げる。

眼無き貌で彼女を見上げた瞬間、人間とは様式の異なる視覚が巨

大な魔法陣を映した。

天はいつの間にか渦巻く黒雲に覆われ、渦の目を中心に金色の環が輝く。

暗雲は小さくなるとともに密度を増して行く。

もう一度、とスポポ１７が翼を広げるが、その時にはもはや手遅れ。

彼の視点からでは分からないだろうが、黒雲は衝天の積乱雲と化し、荒れ狂っていた。

もはやナナセを倒したとて魔法の発動は阻止できないだろう。

すぐさまそう結論付けた異界の紳士は翼を翻して逃走を試みる。

どんなに広域に及ぶ魔法も、どんなに強力な一撃も。

その範囲から逃れてしまえば何の脅威にもならないのだから。

「やっぱり、気付いてないみたいね」

『何にさ?』

遠くから、彼の種族特有の音波魔法によって拾われた声が響く。

「さっきの石突きでの一撃。あれはマーキングだって事よ」

どうやら魔法少女の相棒的な存在と会話しているらしい事は理解

出来た。

それから、マーキングという言葉の意味も理解出来た。

幾つかの意味はあるだろうが、彼女のそれは縄張りを主張するところではない。

かの魔法少女の言うところのマーキングとは、魔法を誘導する為の魔法の事である。

距離については限度があるが、雷速で飛んで来るそれは間違いなくスポポ17より速い。

そして、あれだけの魔力から放たれる一撃の射程は間違いなく数十キロに及ぶだろう。

その凄まじい雷撃が、彼を追いかけて飛んでゆくのである。

彼の異世界の物理法則の知識など無いだろうが、絶縁体で身を守ろうと関係ない。

魔法によって生み出された紫電は減衰さえも否定してその異形を穿つ。

物理法則も、時には因果もねじ曲げる魔の法則。 故に魔法。

もはや逃げようもないと察した彼は、音波魔法で周囲の状況を確認する。

なるべく人のいない河原へと舞い降り、下される鉄槌に備えてう

ずくまった。

もしも、近くの子どもを人質に取れば魔法を中断させられたかもしれない。

それを理解しながらも彼は最期まで己の心意気を、種の矜持を優先したのだ。

かくして、誇り高き異邦人の体軀は眩い閃光に吞まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1800y/>

不意討ち系♪魔法☆少女 ナナセちゃん

2011年12月30日12時48分発行